

「徳成随風」(11)

2013.06.13

諸戸徳成邸

桑高同窓会長 西羽 晃

桑高運動場の南の道路を隔てたところに、破れに破れたブルーシートがかけ
てある建物が見えます。茅葺きの屋根も破れて、哀れな姿をさらしています。
これは諸戸徳成邸（以下、徳成邸と称する）の茶室です。現在の徳成邸は無住
となり、管理人が時々見廻っていますが、建物の補修、庭の手入れも大変そう
です。

徳成邸は二代目諸戸清六が大正末ころに別邸として建てたもので、長男の民
和（1914＝大正3年生まれ）が桑名中学校に第6回生として1928（昭和3）年
に入学しましたが、現在の六華苑の場所にある本宅から尾野山の丘の上まで通
うのが遠いために、中学校の近くの徳成邸から通学しました。従兄である諸戸
精文（1912＝明治45年生まれ）も同居して、桑名中学へ通ったと言われます。

二代目清六は戦争中に本宅が空襲の被害を受けたため、以後は徳成邸に住ん
だようで、1969（昭和44）年に没しました。奥様である「てる」は1986（昭和
61）年に亡くなるまで、ここに住んでいました。

総建坪は1378㎡、うち主屋だけの総建坪は674坪余（204坪余）も
あります。建物自体は樹林に囲まれ、山荘風です。夏は涼しいそうですが、冬
は凍えそう。そのため当初からボイラーによる暖房が主な部屋に配管されてい
ます。

諸戸水道は大山田村（のちの西桑名町）には給水されていなかったのも、こ
の辺りには水道がありませんでしたが、徳成邸では真下にある諸戸水道の貯水池
からモーターで水を汲み上げて使用していました。息子が通っている桑名中学

にも特別に送水されていました。

徳成邸は私の家のすぐ近くにあり、家の窓から屋敷の樹木がよく見えています。高い外塀に沿った道を私は毎日のように通りながら、中はどうなっているのか、気になっていました。内部を桑名市教育委員会が調査することになり、私は4度ほど内部を見せてもらいました。丘陵に沿って建ててあるので、主屋は3段に連続して建っています。2段目も3段目にも庭が付いています。

森林王と言われた諸戸家の隆盛時の建物であり、昭和初期の豪邸の面影を偲ばせてくれます。そして昭和の終わりまで奥様が住んでおられたので、その時のままだに残されて、タイムスリップしたようです。当初のスチームの暖房の他に電気の空調機が取り付けられている部屋もあります。便所・風呂・流し台など水回りは当初のものは改変されて、今風になっています。居間には座り机が置かれ、その前にはブラウン管のテレビが置かれていて、今も奥様が座ってテレビを見ているようです。

徳成邸の始まりは1897（明治30）年に初代清六の長女・たいが死亡したことが起因と考えられ、それ以降に墓所として整備されてきました。墓所の中心に諸戸本家の歴代の墓石が立ち並び、別区画に諸戸分家や諸戸家に仕えた従業員や出入りの職人さんの墓もあります。中には恩師の墓もあります。

庭園は大きな木で覆われ、付近一帯の緑の景観を示しています。その一部に茶室があります。上述した屋根が崩れている建物です。その庭に変わった形の灯籠があります。石幢型灯籠と呼ばれるものです。火袋にあたるところが八角形をしており、石像が彫られています。竿の部分に「善徳王三戊申年」の記銘年が読めます。善徳王とは朝鮮半島の新羅時代の善徳女王（632-647年在位）か

と思われます。しかし善徳女王3年は634年ですから甲午です。記銘年に少し疑問が残ります。

ともかく昭和初期の地方富豪の邸宅として貴重な存在です。現状では朽ち果てそうな存在です。保存のために、何らかの対策が取られることを期待します。



『諸戸徳成邸調査報告書』（2009年3月 桑名市教育委員会）から



諸戸徳成邸 見学会にて 2010. 06. 03



諸戸徳成邸茶室外観 2013. 06. 07